

自然資源の利用に関する環境人類学的研究
—ニカラグアの先住民による商業的ウミガメ漁
の事例—

高木 仁

博士（文学）

総合研究大学院大学
文化科学研究科
地域文化学専攻

平成28（2016）年度

博士論文要約

論文題目 「自然資源の利用に関する環境人類学的研究
—ニカラグアの先住民による商業的ウミガメ漁の事例—」

地球上にある自然の有限性が叫ばれる中、そこで暮らす動物たちの減少と持続可能性もその大きな問題の一つとなってきた。本稿はそうした生物資源へと依存する熱帯地域の人々と稀少動物との共存可能性に関する研究である。本稿では特にカリブ海における草食性ウミガメの最大捕食集団であるミスキート・インディアンを研究対象としてその共存可能性を論じている。

本稿は全7章からなる。まず、第1章では環境人類学の研究動向を展望し、本稿の研究の目的、方法、依拠した研究枠組みについて記述した。研究枠組みとして、これまで蓄積されてきた文化生態学、政治生態学、歴史生態学を総合的に依拠する方法をとった。現地ではのべ15ヵ月の調査を実施し、その研究成果を分析した。

本稿の第2章では、カリブ海のミスキート諸島近海でのミスキート・インディアンの生活の概況について説明した。ミスキート・インディアンというのは、近隣のスム・インディアンと共に東ニカラグアの熱帯低地に暮らす先住民のことを指す。アマゾニア先住民との類似性も指摘される彼らは、キャッサバ芋を主食とし、比較的近年まで森や河川での狩漁撈採集などをおこない、自給自足的な生活を営んできた。

現在、東ニカラグアにおけるミスキートの数は30万人程度に上る。村落の規模も大きくなり、かつてのような自給自足的な暮らしも今は影を潜めている。本研究では、博士論文執筆のために、東ニカラグアの北東部にあるミスキート諸島と呼ばれる海域で現地調査を実施した。元々、内陸の河川流域で暮らしていたミスキート・インディアンらは西欧社会との交易を機に、こうした海岸部への進出を強め、その結果、現代のミスキート諸島近海は数多くのミスキートらが暮らす東ニカラグアにおける一大生産拠点地域となった。

このミスキート諸島は水深20-40メートルの遠浅の大陸棚が、最大200kmにも広がり、パッチ上に広がったサンゴ礁や、海底の海草を求めてくる動物相の豊かさが知られている。なかでも数多くの草食性のアオウミガメが、この地で採食するため、広くカリブ海の各所から回遊してくる。

およそ半世紀前までは、そのアオウミガメを狙って、北の英領ケイマン諸島民が南下していた。ミスキートらは彼らの漁業を手伝うなどして捕獲を重ねていった。当時、ある村では動物性タンパク質のおよそ70%をアオウミガメから得ていたという研究もある。その後、ワシントン条約の批准によって、この地のウミガメの国際取引は禁止となり、ミスキートらが暮らす自治州内のみの捕食が許可されるようになったが、現代でも依然として年間6,000~7,000頭と高い数値で推移している。

本稿は第3章からニカラグア自治州での学術調査とその研究結果を詳述した。本稿では、主に自治州内での現代のミスキート・インディアンの生活とウミガメ生産、流通、消費について論じた。また、各章で現代の漁や生活と半世紀前の銛突きでの漁や、村での互恵的な自給自足的な経済とどのような点で異なるのかを論じている。以下にその結果を要約する

まずウミガメ生産の方法であるが、調査したミスキート・インディアン村落では、1960年代にまで南下し、その後、撤退していった英領ケイマン諸島民の漁法を一部模倣、改良

していることがわかった。現代のミスキートによる資源利用は、外資企業によるミスキート諸島での海産資源開発が隆盛する中、それと併存するため、ウミガメ生産も調査した村がそれを占有特化し、より集約化した生産活動を試みていることが明らかになった。帆船や限られた木製船具でのウミガメの追跡方法は特に見事で、第3章ではその詳細についても記述を試みた。

次にウミガメの流通方法である。現地で大きな舟と呼ばれる木造船で捕獲されたウミガメは、この地での中心的な貿易港や、海辺のミスキート村落へと運ばれる。この草食性のウミガメは、牛や豚、鶏の肉と比べても比較的安価で、商品化されたウミガメは解体され、その肉は自治州都の港町や海辺の村落に至るまで流通している。自治州内というある種の閉鎖的な流通空間において、現代でも女性たちがウミガメ肉を互恵的な物々交換によって取り仕切られなければならない。このことは以前から指摘されていたが、第4章ではその要因がミスキート・インディアンの妻方居住の慣習の名残にあるということをいくつかの家族経営体を用いて例証した。

最後に消費について述べる。本章では調査したミスキート・インディアン村落での食生活とカメ肉消費の変容に着目した。現代のミスキート村落でのカメ肉は他の肉魚類や主食の芋・バナナ類と同様に、現金での交換で取引される。専門の解体者がさばいたウミガメの血肉臓物は、ミスキート・インディアンたちが安心して消費できる身近な肉魚類（現地語ではウーパン、Wupan という名詞で呼ばれ、珍重されるもの）の商品となっていた。

調査した村では、焼畑や農園から獲れる自給的な農作物への依存度が1960年代の研究結果と比べても驚くほど低く、漁業で稼いだ金で芋やバナナを購入して生活している。辺境な地理的条件に置かれている調査村落でも、自治州都の港町から新しい調味料や、玉ねぎなどの食材が入るようになっている。第5章ではミスキートの主婦たちが、こうした変化する生活に合わせてどのように献立しているかを記述した。例えば、高血圧を患う夫には脂分の少ない赤身肉の水煮を調理し、老人たちには栄養分が高いとされる血をわけ、子供達にはウミガメの赤身肉でミンチ・ハンバーグを作り、それにケチャップをかけて提供するなど、調理にも工夫がみられた。

上記結果を踏まえ、本稿の第6章の議論ではまず、半世紀前と現代のミスキート・インディアンのウミガメを介した生活がどのような相違点があるかについて論じた。特に現代のウミガメ漁が、旧来の「先住民による自給的漁撈」という形式的な位置づけで適用することはできないことを強調し、ミスキート・インディアンの生活史や、ウミガメをめぐる変遷、現代の商業的な海産資源利用が持続を可能にしている海辺の人々の生存実践をふまえた保全戦略を立案する必要性を訴えた。第7章の結論部分では、熱帯地方に暮らす人々とウミガメの持続的な共存の可能性を考慮に入れた保全戦略の立案を試みた。そうした保全戦略の中で、近年の西カリブ海でおこなわれているような近代的な英領ケイマン諸島における最先端養殖技術や、コスタリカの国立海洋公園で行われている産卵管理や頭数管理、生態調査と本稿で示したような先住民自治州村落でのインディアンなりの最先端の生産科学や新しい生活科学が可能にする人々の生存とを同時代的な共有項としてとらえる必要があることを示した。